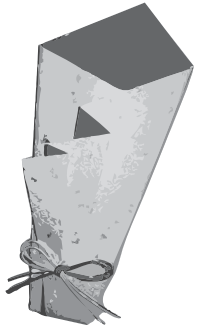
暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

～第七二号～

大雪　十二月七日



折形

早いものでもう師走も七日が過ぎました。

この時期は、日頃お世話になっている人に一年の感謝の気持ちを込めて贈るお歳暮の時でもあります。お歳暮はもともとは年越しの「御霊祭」で塩鮭や、するめ、数の子を祖先の霊に供えた名残で、嫁した娘や分家の者がこうした供物を本家に届けたのが始まりといいます。

これまで、お歳暮には当たり前のように箱にのし紙を巻いてきましたが、近頃、日本には贈り物を和紙で包む「折形」という礼法があることを知りました。

「折形」は、古くは鎌倉時代まで遡りますが、室町時代に武家の礼法として重んじられました。江戸時代には庶民にも広まり、戦前までは定着していたといいます。「折形」という言葉は知りませんでしたが、贈り物をむき出しにせず、純白の和紙で折り目正しく包み、水引で結ぶことによって、贈る気持ちを表す心は、今の時代にも引き継いでいるように思います。

折形製法教室を主宰する山根一城さんの『日本の折形』を拝見すると、木の花包み、櫛包みなど、伝統的な型約七十点がずらり。ちょっとした贈り物や正月用に適したものもあり、現代の暮らしの中にも取り入れられそうです。山根さんは「折形」で白い和紙を用いるのは、太陽神をイメージする天照大神への信仰が根底にあるのではないかといいます。生命を育む源である太陽の白い光を表しているのだと。

戦後姿を消してしまったという「折形」。贈り物の季節に再認識した日本人の美意識でした。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁